

「卵子提供の功罪、特に商業化という罪」

大野和基

1. はじめに

自分の国ではできない治療を求めて外国に行く、あるいは、日本で卵子提供を受けるのがほとんど不可能であるから海外で治療をうける。これを生殖ツーリズムといいます。地中海に浮かぶ小さな島キプロスは、今は世界の卵子提供の都です。ウクライナやロシアから、女性が卵子を売りに来ます。殆どが白人です。アメリカ人や、ヨーロッパ人は白人を好みますから、いくらでも売れます。しかも、受精卵の段階で着床前診断をすればすぐに男女が分かるので、性選別も行われています。1人目男の子、2人目男の子、3人目はどうしても女の子が欲しいという場合、女の子を選びます。仲介する旅行代理店は観光とセットでこのようなサービスを行っています。

卵子や、実際に産まれてくる子どもは完全に商品です。しかし、子供が原因不明の病気をもって生まれてきたり、代理母や卵子提供者が癌などの病気になったり、それが原因で死ぬという問題が起きています。さらに、皆さん御存じのように、日本人がインドで頼んだ代理出産で、産まれた子供が無国籍となり、パスポートが発行されないという問題がありました。子供の自己の出自を知る権利という点からも問題があります。子供は遺伝上の親が誰であるか分かりません。依頼者である親から見れば、子どもが生まれてくればそんなことはどうでもいいのです。子どもに、いくら告

知するように言っても、なかなか納得してもらえません。さらに、エージェントの情報提供が担保されていないという問題があります。ハーバードを始めとしたアイビーリーグの学生で、SAT(注：大学進学適性試験)で満点をとると、突然卵子の値段が5倍になったりします。しかし、本当にSATで満点をとったのかどうかは分かりません。このように生殖ツーリズムには様々な問題が存在します。



2. 市場の道徳的限界の問題

ハーバード大学のマイケル・サンデル教授に生殖補助医療について取材したことがあります。「卵子提供や精子提供、代理出産についてどう思われますか。お金で買うべきではないと言う人もいますが、あなたはごどう思いますか。インドのように外注するというビジネスもありますが、あなたはごどう思いますか」という質問をしました。サンデル教授は「それは社会的善と社会正義に関してお金が果たす役割の問題の視点から考えるべきであると」応えています。「本当に自由



な選択だったのか」つまり、「お金がないから、それによって自分の決断が強制されていないか」。お金がない状態で、あなたの子宮を一度貸してもらえば1万ドル払うという場合、その決定は自由な決定になっていません。もし、彼女が普通の生活ができていれば、まず考えないでしょう。私が今まで取材した代理出産の人も、卵子提供者も、皆お金がない人です。お金がある人はやりません。保険はないし、高いし、保障がないですから、お金がない人は頼めません。1回卵子提供しても子どもができる保障はありませんから、5000ドル程ですむか、10,000ドルか20,000ドルかかるか分かりません。保障がないのにお金を費やすことは、お金があまりない人はできません。だから依頼をする人はお金持ちです。一方で、卵子提供する人は、やはりお金はありません。

「ロサンゼルスに住んでいる日本人留学生の中には、授業料が払えなくて卵子を売って払っている人もいるが、どう思うか」とサンデル教授に聞くと、彼は “I think this is troubling and objectionable.” と言っています。英語の“troubling”は、「本当に頭を抱える」という感じです。“objectionable”は、「聞いただけでも不快だ」という意味です。その上で、2つの理由を挙げています。“It’s taking advantage of economic pressures.”つまり、「やはり、相手にお金がないから、卵子提供はどうですかと言っているのではないですか」と。親から送ってもらったお金は遊びで使ってしまい、「もう1回授業料を送って」と言うのは躊躇われます。ロサンゼルスは、ご存知のように遊ぶ所は沢山ありますが、それにはお金が必要です。遊ぶ所も近くにあるし、きりがありませんが、留学生の中には遊んでばかりいて、日本人同士集まって英語が

まったくできないまま帰ってくる人もいます。アメリカでやったのは、ただ、卵子を売っただけ、そういう人もいます。もう一つの理由は、“But more than that, it can be a form of disrespect for the dignity of women.”つまり、「女性に対する尊厳を損なうものである」と。お金がなくなるとどうなるか、あれば普通絶対に考えもしないことまでやるようになります。あまりない状態でもよくないのです。普通の生活ができなくなり、精神的に維持できなくなります。とにかく生きていかないといけないので、もう何をやってもいいと思うようになります。今日食べるものもない状態になったときに、卵を1個売れば6,000ドル入ってくると分かれば、卵子提供をやる気持ちが出てきます。そういう状態につけ込んでいるのが卵子提供のエージェンシーです。

エージェンシーに連絡をしてくる人は、授業料を払えない、あるいは車が欲しい、クレジットカードの借金があるなど、ほとんどがそういう人です。十分にお金がある人は、連絡してきません。何千ドルのお金に魅かれることもありません。毎月の生活が苦しいという人も連絡してきます。そのときに、エージェンシーは卵子提供にともなう健康上のリスクのことは、重要なこととして明確に説明しません。

3. エージェンシー(仲介業者)の問題

「私の卵は6,500ドル」と書かれた資料を見てください。6,500ドル、高いですね。6,500ドルと聞いただけで、魅力的な額です。2枚目は、去年、『AERA（アエラ）』の11月14日号に私が書いた記事で、アメリカのロサンゼルスと、サンフランシスコで取材したも



のです。卵子提供を実際にやったアメリカ人と日本人にもインタビューしました。

「卵子提供、一人でも多くの人を助けてあげたい。見つけた、今の私にできること」という広告が日系新聞に出ています。ここに、「7,000 ドルから」と書いてあります。その 7,000 ドルという数字を見ただけで、「これで 1 学期の授業料が払える」とか「これで車が買える」などと思います。

もちろん卵が売れないといけませんから、当然、いかにして自分の卵を売れるようにするかがかなり重要になってきます。単に登録するだけではだめです。卵子提供をしてほしい夫婦は、カタログを見ながらかわいい子を選び、学歴などを見ます。そのときにエッグドナー登録フォームが重要となってきます。エージェンシーによってはかなり細かいものを使用しています。

ある提供者は、自分の名前は嘘をつけないにしても、小学校や中学校で得意不得意のところは自己申告だからうそがつける、と言いました。数学が得意と書いても、数学のテストはありません。いかにして自分の卵が買われるか、と考えた場合、得意のところは嘘がつける、と言ったのです。私に話してくれた卵子提供者は、どの部分で嘘をついたか具体的に教えてくれませんでした。が、「こんなこと、本当のことを書く人いるのかな？」と言っています。だから、成績などは嘘をついているのでしょう。依頼する夫婦は学歴や成績を見ますね。かわいさが同じなら成績を見ます。人によって選ぶ基準は違いますが、やはりそういうところを見ます。自分の卵が売れないとお金がもらえませんから。

さらに、卵子をこれから提供しようとする人に渡す

情報と、クライアントに渡す情報が違います。どう違うかという、例えば、卵子ドナーは、感染症などの血液検査は全部していますから大丈夫だと依頼してくる夫婦には言います。実際に卵子提供した人がそれほどの検査をしたかという、していません。クライアントには、これだけの検査をしているから大丈夫だと言っても、実際には卵子提供者は検査していないのです。そこに情報の食い違いがかなりあります。

サービスを売る側と、サービスを受ける側の情報の違いはかなりあります。ホームページを見ても、卵子提供者用に見てある情報と、卵子提供を受ける側は、よく見ると少しずつ違います。悪いことは書きません。「副作用があります」と書いても、それこそルーペで見ないといけなくらい小さく書いてありますが、それで死にかかった人の話は書かれていません。3～4 年前の排卵剤では、副作用で死んだ人、あるいは子宮を取ってしまう人は、実際に 30～40% いました。かなり高い率です。10 人中 3～4 人にそれだけの副作用があり、実際に子宮を取ってしまうと、当然二度とできません。

4. 子供の自己の出自を知る権利について

今問題になっている、子供の自己の出自を知る権利についての話に移ります。出自を知る権利は、遺伝学上の親のフルネーム、どこに住んでいるか、どういう職業かを全て知ることです。いずれは情報網にアクセスできるようになるでしょうが、今はできません。出自を知る権利が確立していないのに、やっているのは「赤ちゃんが欲しい人がいるから」、それだけです。その権利がまだ保障されていない間に、精子提供も卵



子提供もどんどん続いています。

告知して、誰が実際の提供者になったのか、フルネームも住所も本当に全部分かる。それを提供された人に渡して、初めて出自を知る権利が守られると思っています。ただ単に、「あなたはこう産まれてきました。提供を介して産まれてきました」というのは、出自を知る権利にはなりません。しかし、この自己の出自を知る権利は、まだ卵子提供エージェンシーでは十分に考慮されていません。選択制になっています。将来コンタクトしてもいいかどうかの項目があり、そのときにまた気持ちを変えることもできます。そのときにコンタクトをしてもいいと今丸をしても、実際にコンタクトされたときに気持ちが変わってもいいのです。しかし、それでは、まだまだ甘いのです。そのときに気持ちが変わったから、やはり会いたくないと拒否できます。それは、私はだめだと思います。

最近、日本でも提供精子で産まれてきた子どもが声を上げるようになりました。私は日本以外ではニューヨーク、イギリス、オーストラリアで、実際に提供精子で産まれてきた人に会いました。話を聞いたら、国籍も肌の色も関係なしに、全員に共通するのは、「このようにして産まれてきたくはなかった」ということです。皆途中で告知されています。二十歳のときに告知された人もいますし、5歳で告知された人もいます。

41歳で告知された人もいます。彼女の場合は、子どものときに、「あなたには秘密がある」とだけ言われて、お母さんと別れた後、41歳になったときに手紙がポツンと来て「実は、あなたはお父さんと血はつながっていません」と一言書いてあったそうです。目の前で言われたのではなくて手紙一つです。彼女に会ったら、「許せない」と、取材が始まる前から怒っていま

した。目の前で言われたのではなくて、手紙でポツンと来たからです。それは卵子提供でもまったく同じです。これほど重要なことを手紙だけで済まそうとするのは許せません。

子供の出自を知る権利は、まったく無視されています。大きくなったときはもう遅いのです。「人間として産まれてきたことをありがたく思いなさい」と言われても、「嫌です」と取材したみなさんに言われました。5歳のときに告知された人からも言われました。

それと同じことは、卵子提供についても言えます。自分の、本当に生物学的につながっている親を知りたいと思うのは当たり前で、それがまったく保障されないまま、どんどん進んでいます。実際に提供精子で産まれた人に聞くと、この気持ちは、経験しないと分からないと言われますが、自ら進んで経験できるものではありません。卵子提供であっても精子提供であっても、自分の遺伝上の親がわからない状態が永久に続くことを想像すると、やはりぞっとします。

提供者に実際に会うのが一番いいと思うのですが、今はほとんど告知しませんから会いようがないのです。実際に遺伝上の親に会った人の話を聞きました。オーストラリアで私は、精子提供で産まれてきた女性に話を聞きました。彼女は二十歳のとき、親が離婚しかかったときにその事実を教えられて、「私の本当のお父さんを知りたい」と、地元の新聞にトップ記事で記事が出ました。それを読んだ遺伝上の親から連絡があり、見事に会いことに成功しました。そうすると、やはりホッとしています。

自分が卵子提供で産まれたことや精子提供で産まれたかは、告知されなければ分かりません。だから、告



知を義務付けて、提供者に会うシステムを作らないとだめです。それを作るまでは、一時的に全部ストップすべきです。オーストラリアのヴィクトリア州は1988年7月1日以前に提供配偶子、つまり提供卵子や提供精子で産まれた人は、ドナーに関する情報のアクセス権利はありませんが、1988年7月1日から1997年12月31日の間に産まれた人は、ドナーが同意すれば情報を開示します。1998年1月1日以降に産まれた人は、無条件にドナー情報にアクセスできます。2008年を通り、2010年から施行されている、生殖補助医療規制法(Assisted Reproductive Technology Act)という法律があります。2010年1月1日以降に提供配偶子、つまり卵子、精子、それから提供胚、受精卵で産まれた子どもの出生証明書には追加情報があると書かれています。

16歳になると親の許可なしに自分で出生証明書を入手することができますが、そのときに追加情報があることが書かれていて。遺伝上の親は、提供者の登録にあるから自分で調べられることになっています。親がいくら隠していてもばれます。日本でいう戸籍謄本に、提供精子で産まれたとか提供卵子で産まれたと、記入するのと同じです。遺伝的につながっている親の名前、仕事など、全部がインターネットでアクセスできるようになっています。

でも、実際には勝手に会いにいきません。相手も家庭がありますから大変なことになります。お互いにカウンセラーがついて、カウセンリングを受けた準備万端の状態で会います。それを分かって提供しますから、後から会いたくない人、コンタクトされたくない人は、たいてい提供しなくなります。この制度をそのまま取り入れて、戸籍謄本に必ず書くなど、日本用に修正す

ればいいだけです。同様のレジストリーでマッチングがきちんとできるようにします。遺伝上の親のフルネームも分かるし、会いに行ける。そういうシステムを作らないと駄目です。会いに来られたくない人は、提供しなければいいのです。それを言うと、提供する人がいなくなるのではないかという反論が出てきますが、提供者がいなくなったら、やめればいいのです。

精子は医学生がドナーになることが多いのですがどうでしょう。医学生に、将来コンタクトされるかもしれないと言うと、その医学生はやらないかもしれません。でも、卒業してきちんと家庭を持ち、子どもを持ち、家庭というものがどういうものか分かっている人が提供するようになれば、それはまったく異なります。提供者の種類も変わり、年齢も当然上がります。やる意味が分かって提供することになります。

5. 子供の健康上のリスクの問題

精子提供で生まれた子供の中には原因不明の病気をもって生まれてくる子がいます。今でも言われていることですが、20年後、30年後の追跡調査で子供が大きくなってから、発育・発達、脳の発達が遅かったと言われても遅いのです。

加藤さんという精子提供で産まれた医者が、精子提供のことを「壮大な社会学的実験」と言っています。20年、30年たないと結果は出てこないから、そう言ったのです。薬なら、今この薬ですぐに治れば、当然その薬で効果があったことが分かりますが、生殖医療の場合、20年後、30年後、おかしいことがわかったらどうするのですか。そのリスクを説明しても、やはりやる人はやります。



毎日新聞の記事の中で、野田聖子さんが「なぜ、そこまでして産みたかったのか」ときかれています。彼女の答えは、「ただ欲しかっただけ」でした。この答えに全てが出ています。不妊治療している人は、子供の自己の出自を知る権利について、考慮しません。精子提供で生まれた日本人女性は、お母さんが亡くなる前に問いただしたことがあります。お母さんは、「ただ子供が欲しかっただけ」と、ひと言言って亡くなったそうです。自分がアイデンティティのことで、どれだけ悩んでいるのかは、親からみれば一切関係ないのです。

ご存じのように、野田聖子さんの子どもは満身創痍で生まれてきました。彼女自身は、出産した2日後に子宮を取っています。「卵子提供や高齢出産が息子さんの障害の原因という誤解を受けましたね」との質問に、「医師の皆さんは、高齢出産や卵子提供とは関係ないと言っているのですが、まだまだ誤解する人や批判する人は多いですね」と毎日新聞で応じています。しかし、これは関係あると思ったほうがいいです。

なぜかという、理由は読売新聞の中林正雄さんの記事にあります。「他人の卵子であること自身が、妊娠・出産の危険性を高めることは、提供を受ける女性にも、医療現場でも、あまり知られていない。卵子も精子も他人のものなので、妊娠が成立する段階で排除しようとする免疫の働きが強くなり、母子ともに危険が及ぶ妊娠高血圧症候群や胎盤の異常などを起こしやすくなると考えられている」。つまり、医学的リスクはあるのです。野田さんは、「それは関係ない。自分が子宮を取ったことや、子どもが満身創痍であることは関係ない」と言っています。知らないわけだから、関係ないと言う医者もいるかもしれません。しかし、

まだ長期的な調査をしていませんから。そういう調査結果が出ていないときは、リスクはないと思うよりも、リスクはあると思ったほうがいいのです。リスクがないと思って育てて、20年、30年たってリスクがあると分かって、そのときはもう遅いのです。だから、普通はリスクがあると思ったほうがいいのです。

6. 卵子提供者の健康上のリスクの問題

『AERA』に書いたアメリカ人の女性の場合は、論文を書いているときに、大学を卒業するのにあと3,000ドル必要だったのですが、その3,000ドルを送ってくれと親に言えなかったのです。カンザスのまちに住んでいるときに、「卵子を提供すると3,000ドル」という広告を見ました。彼女は卵を1個売ったら、死にかかりました。その死にかかった状態はすごい状況です。

「翌週再び激痛が走って病院へ行くと、右側の卵巣がねじれて卵管と絡み、グレープフルーツ大に腫れ上がっていた。即手術。二つあるうちの一つの卵巣を切除した。たった3,000ドルのために、こんなに苦しむなんて、と後悔しました」とあります。しかも彼女の場合は、その後がんになっています。「それだけでは終わらなかった。5年後には両方の乳房ががんになり、切除せざるを得なかった。乳がんの家系でもないし、

乳がんの遺伝子検査もしましたが、遺伝子異常は見つかりませんでした。原因として考えられるのは卵子提供しかありません」とあります。アムステルダムのある教授が言うには、「卵子提供による長期的な影響はまだ分からない部分が多いが、排卵誘発剤を使った女



性は、そうでない女性と比べて卵巣がんにかかる長期的なリスクは2倍」という結果があるそうです。もちろんこれは、まだまだ検証する必要はありますが、少なくとも癌になりやすいということは言われています。例えば、原子炉がある半径1キロ以内に住んでいるから、がんになりやすいかという、今は分かりません。でも、30年間ずっと調べると、明らかに増えています。そこに原子炉があるからという因果関係を突き止めるのは、疫学的調査をやっても、ものすごく難しいのです。具体的にどう証明するかは、統計しか証明できないのです。でも、わかってからでは遅いのです。



開で子供は助かりました。しかし母親は亡くなっています。

代理出産をして亡くなった人の母親にインタビューしたことがあります。何年たってもその怒りは消えないと言っていました。お母さんにお金欲しいと言えなくて、小さな広告を見つけて代理母をやり、赤ちゃんを産む2カ月ぐらい前に心臓麻痺で死んでしまいました。この場合、彼女も赤ちゃんも亡くなりました。そのあと、斡旋業者はボーイ捨てでした。彼女の場合、一銭も渡さずに、ごみのように捨てられました。同じようなことが他にも起きています。聞いただけで腹が立って腹が立って仕方ないですが、怒りを抑えながら取材を続けています。

以前取材した、向井亜紀さんの代理母をしたシンディーさんは子宮破裂しました。1人目が向井さん、2人目が日本人ご夫婦、3人目のカップルで子宮破裂しました。なぜ破裂したかという、毎回帝王切開するから、当然、健康上のリスクは高くなります。取材は拒否されましたが、本人は、もう子どもはいるから子宮破裂してもいいと思っていないと思います。

何事をやるときもリスクがあります。私も世界中に行きますが、まだ戦地に行ったことはありません。戦地に行かない理由も、それは分かるでしょう。行った人はもちろん偉いですが、行かない理由はあるし、それはどれだけリスクを取るかです。

7. 代理母の健康上のリスクの問題

インドにおいて、代理母になった女性が途中で亡くなり、赤ちゃんだけが助けられたという報道が今年に入ってされました。1カ月早い早産でしたが、帝王切

8. 高齢出産の問題

坂上みきさんが、53歳で妊娠しました。おかしいと思いますが、それ以上詳しく調べようとしても彼女は何も言いません。これだけ聞いたら、「私も50歳でも



大丈夫」と思ってしまいます。野田聖子さんもそうです。彼女が子どもを産んだときに『AERA』にも書きましたが、「50歳の私にもできますか？」と、ロサンゼルスの子供提供のエージェンシーに電話が殺到しました。ほとんどできないのに、できると思ってしまふ人がでできます。

アメリカで卵子提供を受けたあと、そのことを言わないで日本のクリニックに来る人が多いです。話していると、もおかしいので、途中で卵子提供を受けたことを言う人もいます。卵子提供だと自分の卵子を使っていないわけだから対応が変わります。でも、なかなか言わないのです。本当は正直に言わないと、医者も困ってしまいます。一番肝心なところを隠しているわけですから。自分の卵子か人の卵子かで全然違います。どう考えても53歳はおかしいのです。カルフォルニアで卵子提供を受けましたと言うべきです。言わないと、正確なデータ収集はできません。医者にとっては、言わない人は、疑ったままになり、正確な情報ではないわけですから、データに入れることもできないのです。もし本当に卵子提供だと分かって対応していれば、データに入れることができます。国全体というか、一般のことを考えると、医者のためにもほかの人のためにも、追跡調査のためにも全部正直に言ったほうがいいのです。

9. おわりに

私がアメリカの医学部に行ったのは1981年で、まったく今の医学とは違います。ICSI（注：イクシー。顕微授精のこと。「卵細胞質内精子注入法」といい、顕微鏡下で精子と卵子を受精される方法）などはない

し、体外受精は1978年からだから、まだ十分に定着していないし、全てが実験段階でした。脳の検査にしても、MRI（注：核磁気共鳴画像法）、f-MRI（注：MRIを用いて脳や脊髄の血流動態反応を視覚化する方法）ありませんでした。

やはり自分は医学に向いていないと思って2年で辞めました。ジャーナリズムの世界で生きていこうとは、そこで思いませんでした。この世界に入ったら面白くて、辞められなくてこのまま来ました。特にその中で印象的だったのは、皆さんご存じの、1987年のベビーM事件（注：米国で起きた事件で、代理出産を行った女性が子の引渡しを拒み、養育権を求めたことから裁判になった事件）です。

精子提供で実際に産まれた人と話すことができないかなと思ったら、最近になって急にできるようになりました。状況が変わると想像していた方向と違う方向に行ってしまう。やはり経験した人に直接話を聞くしかありません。今は卵子提供に興味があります。卵子提供はまだ新しいから、卵子提供で産まれた人が、まだ大人になっていないのです。大人になったときにどうなのか、精子提供と同じような悩みを、間違いなく持ちますよ。実際に精子提供で産まれた人を、アメリカで何千例と調査した中で、7割の人は「嫌だった」と、言っています。後から遺伝学上の親に会った人も、そこで新しい家族関係を作った人もいます。しかし、今までのアイデンティティーの空白はある程度埋まっても、自分が提供精子で産まれた事実は消えないから、それをずっと持ち続けるのです。自分と結婚する人も、その子どもも、永久に続きます。自分が関係ないと思ったら大間違いです。もしかしたら結婚した相手が、自分も知らずに提供配偶子で産まれた人と結婚



するかも分かりません。結婚した後に、子どもが産まれて、初めて突然親に教えられてびっくりします。今まで自分の親だと思った人が違ったのです。自分の子どもからみても、アイデンティティの一部が分からなくなるわけです。それでもものすごく悩む人もいます。

だから私は反対するのです。実際に精子を提供した人で、今猛烈に反対している人が、先ほど言ったオーストラリアの人にいます。実際に会ってきました。彼の精子でできた人と新しい家族関係ができていますが、それでも反対します。ややこしすぎるのです。このようなややこしい家族はもういないそうです。でも、もう自分はその事実は消すことはできないから、一緒に生きていくしかないのですが、ほかの人には絶対勧めないと言っておりました。

その彼も、どんな時代に精子提供で産まれた人も、全ての情報にアクセスする権利を持つべきだと主張しています。

つまり、匿名で精子を提供するという約束はあっても、今は匿名よりも子どもの福祉の方が重要だということです。英語で言うと *well-being*、日本語にはものすごく訳しにくいですが、*well-being* は、人間の精神的・肉体的な、今満足している状態、充実している状態を全部含めていいです。

オーストラリアのヴィクトリア州では、「私は匿名を約束されて提供しましたからコンタクトしないでください」という、拒否権があります。匿名を約束されて提供したのに、突然だめと言われるのは、やはりだまされた感じになります。だから一応昔提供した人は拒否権があります。

もちろんカウンセラーによる十分なカウンセリングがされた状態で、お互いの家族が破壊されないように

教えられます。そういうシステムがきちんとない状態で、日本は今どんどん海外へ行っています。

日本の場合はそこまでお金は動いていないけれど、少なくとも日本人がカルフォルニア、ロサンジェルス、タイ、キプロス、にツーリズムをすることで、莫大なお金が動いています。そのビジネスを見ていると、止めようがないから本当に嫌になってきます。それこそシリアで亡くなった山本美香さんではないですが、私には報道を続けるしかないのです。ただど一人一人をつかまえて、「やめてください」と言えません。私がカウンセラーのライセンスを取って、カウンセラーとして「やめてください」と言うのも変ですから、子どものことまで考えて、1人でも「やめよう」となるよう、執拗に報道をし続けるしかありません。

不妊治療は夫婦間だけにしてほしいです。他人のおなかを使う、他人の精子を使う、他人の卵子を使う、その一線を越えることはかなりハードルが高いのです。ハードルは高いけれど、それを越えないでほしい、夫婦間だけでやってほしい、それが私の希望です。それを言うと、何十億ドルというビジネスが成り立たなくなるので、訴えられることもあるかもしれません。



質疑応答

質問者 1：お話の中で、卵子提供をする医療行為を、一部でも保険対象として実施している国はあるのでしょうか。

大野：オーストラリアでは年齢制限がありますがやっている州があります。フランスは、42 歳までの年齢制限があつて保険が出るのもあります。年齢制限はあつた方がいいと思います。年齢制限をつけないと、それこそ 50 歳でやる人もいますから。だいたい 40 歳から 42 歳まで保険対象でやっています。

質問者 2：質問が 2 点ございます。一点は、卵子の提供を受けた場合の夫婦、夫側と妻側で、どういう話し合いが行われるのか、何かそういうことで特筆すべきことを教えていただきたいと思います。もう 1 点は、精子提供の場合、基本的なことですが自分の妻に他者の精子が入ることに対して、夫が何か心理的な影響を受けることもあるのでしょうか。

大野：まず卵子を提供してもらう場合、奥さんからは切り出せないです。自分の卵子が原因で子どもができ

ないと分かっている、卵子提供で子どもを作ろうと、旦那になかなか言い出せません。エージェントに聞きましたが、旦那から、「他人の卵子を使ってもいいじゃないか」と言われる。そこから話し合いが始まります。旦那の同意をえない場合、勝手にそれはできません。精子提供に関しては、結構複雑です。九州の有名なクリニックに行って話を聞きましたが、離婚になる場合もあります。育てる父親が、自分の息子とは言っても血はつながっていません。それが虐待につながる場合もあります。

二十歳のときに親が離婚するときに初めて教えてもらって、「だからお父さんはよそよそしかったのだ」と、父親の行動に初めて納得する人もいます。父親が、遺伝上の子と同じように育てられるとはどうか、それは比べようがありません。

どちらにしても複雑です。夫婦げんかをしたときに、精子提供の場合は、お母さんから見たら、自分とは血はつながっているわけだから、子供を味方にしようとして。夫婦げんかのときに言ってしまう人もいます。子どもにしたら、親はけんかする、それで離婚する、また事実を告知されて、ダブルパンチです。大混乱になります。だから私は、子どもが悩むのが目の前に見えていますから、本当はこういう子供の作り方をやめてほしいのです。でも、子供がアイデンティティの問題などで、どれだけ悩むかということを、今不妊で悩んでいる夫婦に言っても分かってくれません。

質問者 3：精子提供で生まれた 70%の方が、「こんなふうになんか産まれたくなかった」というお話を聞きました。残りの 30%の方についてですが、こうやって産まれてきたけれど、やはり幸せだ。親に感謝している。生物



学的な親も含めたファミリーとしてそういう家族を作っているような例はないか、教えて頂きたいです。

大野：私が『G2』という講談社から出ている雑誌にも書いた、DSR (Donor Sibling Registry) の話があります。そこに自分の精子提供者番号を入れる、あるいは精子提供で産まれた子どもが、母親から聞いた番号を入れるとマッチングできます。

自分の本当の親が見つかるサイトがあるのですが、精子提供を受けた子にインタビューしたことがあります。その方は自分のお父さんを見つけて、実際に会っています。おじいさんにも会っています。そういう人は、「こういうふうに産まれたくなかった」と最初は拒否していますが、会った後は、その事実を受け入れています。遺伝上の父親やその親にも会えば、自分のアイデンティティーの空白だった半分か埋まりますから。それから新しい家族関係というか、年に2回、夏に1回、冬に1回会いにいき、割と良好な関係を結んでいます。

残りの30%の人の中には、実際に遺伝上の親に会っている人が多いと思います。今まで親に対して冷えていた気持ちを変えて、前向きになっています。DSRは、精子提供で生まれてきた子供がきっかけで作られました。今まで、母親に対する怒りなどがあったのですが、DSRを作ったおかげで遺伝上の父が見つかり、感謝しているそうです。前向きになるように、お母さんが努力してくれたことについても感謝しています。

オーストラリアのヴィクトリア州では、何十年も前に精子提供で産まれた子どもは、一応会いたい場合に会えるように法を作ろうとしています。ただし、その法律には遺伝上の親の拒否権があります。イギリスで

は法制化されていませんが、取材した方で、こっそり探して、お父さんが見つかり会った方もいます。お母さんに対する怒りは消えませんが、今はお父さんとは仲がよいです。お母さんに対する怒りはかなり収まったのですが、まだ残っているようです。お父さんとは実際に会って、本当にすっきりした気持ちになり、話し方も変わりました。やはり会うと違います。

以前に、慶応大で治療を行っている先生に、「遺伝上の父親に会わせてもいいのではないですか」と言ったら、怒鳴られはしませんでした、「だめです」と言われました。なぜでしょう。会わせてあげるのが、かかわった医者への義務だと私は思っています。絶対に会わせたほうがいいのです。しかし、日本では反対意見が強いです。

質問者4：以前何かで読んだことがあるのですが、野田聖子さんが、35歳を過ぎるととてもリスクが高まる、卵子が老化するなどを、「誰も教えてくれなかった」という発言がありました。私は同じ女性として、20代の妊娠、やはり30歳を過ぎたら少し危険があり、「35歳を過ぎると……」というのは、常識として知っていると思っていました。けれども、意外と、若い人たちは何も知らされていないようです。それが今の状態であれば、やはり報道と、さらに倫理教育、つまり小学・中学・高校の時代から生殖に関する起点などを、性教育などの教育の中に取り入れることが非常に大切なのではないかと思います。

不幸な事態になる前に、やはり報道と、学会も含めて、中・高からの教育がすごく大事だと思いますが、そのあたりの感想はどうでしょう。

大野：それは言われた通りだと思います。私と同じぐらいの年の、結婚もしていて、仕事も続けていて、子



どももいる方に聞いたのですが、やはりある時期、キャリアを取るべきか、子どもを産むべきか悩んだ時期があるそうです。彼女は、それは「女性の本能でしょう」と言っていました。今の間に子どもを作らないと、後からできないのではないかという知らせ、天からの啓示ではないですが、そういう感じです。それともキャリアを辞めるか続けるか、旦那がどういう仕事をしているか、どこに住んでいるかの関係もあるのですが、だいたい悩む時期はあるそうです。

今は、もう女性が働くのが当たり前のようになっています。私の年代というのは、同世代を見ても、働いている人はすごく少ないです。非正規雇用などはなく、完全に男の人が主流でやっていける給料をもらっていましたから、女性が働かなくてもやっていけるようになっていました。でも、今の給料を見ると、女性も働かないとやっていけないような仕組みになっています。そういう面も悪いのです。社会全体が女性も働かざるを得ないような状況にさせてしまっています。本当は、昔のように働かなくてもいい状態であれば、卵子の老化などと言わなくても、普通に結婚して子どもを産んでいると思います。女性が働くこと自体に問題があるのではなく、自分から進んで働く場合と、働かざるをえない社会状況とは異なります。

今は30歳でも結婚していないのは当たり前で、逆に30歳で結婚したら「えっ」という感じです。それほどまでに時代が変わりました。でも、おなかの中の卵子に関しては、まったく変わっていません。だから、この「卵子の老化」という新しい言葉が、最近言われるようになったと思います。いろいろな意味で、社会全体が変わらないといけません。

昔テレビ朝日でやっていた『サンデープロジェクト』

の仕事で、イギリスの労働に関して取材したことがありますが、向こうでは、女性が働いていても、子供を産める状況になっています。日本では、今年収1,000万円だとしても、赤ちゃんを産んだあと、子育てのために正社員のまま、週2回だけ出勤することは無理です。1回仕事を辞めて間を取ります。そうすると収入がガクッと減ります。

イギリスはどうかというと、週2日でも3日でも正社員です。週3日の場合は、年収1,000万円の場合、5分の3で600万円もらえるのです。子どもが10歳ぐらいに大きくなったら、週3日から4日に仕事を増やします。そうすると、年収もきちんと5分の4になるのです。これはとてもいい制度で、スキルを維持したまま子育てができます。

日本の女性労働者に対する扱いは最低です。これほどひどい国はないです。大手企業でも、重役、いわゆる経営陣の中にどれほど女性が入っているか。50人中2人という割合は、少なすぎます。やはり20人ぐらい入らないとだめです。議員も、女性の割合がものすごく少ないです。メディアにも、女性は少ないですね。そういう社会状況を変えないといけないと思います。女性が子育てをしながら、快適に働ける社会状況を作らないといけません。

卵子の老化についても早期教育すべきです。生殖について、わかりやすく説明すればいいのです。卵子と精子があって産まれるのですが、卵子はいくら磨いても光りません。25、6歳を超えるとどんどん古くなるだけだと説明するべきです。小学校5年生ぐらいからやるべきだと思います。

以上